
森の秘密基地

ただ書く人

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森の秘密基地

【Nコード】

N2409Y

【作者名】

ただ書く人

【あらすじ】

「わたし」が幼い頃にとともに遊んだYさんとAくん。

彼らと作った秘密基地での思い出をたどる「わたし」は、Aくんの存在に疑問を抱く。

少し不思議なこどもの少し不思議なエピソード。

「たんとんとショートショート」というサイトに掲載済みの作品です

何を売っていたのか今でもわからない商店のある角を曲って、未舗装の砂利道に入る。

その商店の裏手はもう森だった。

走って三十秒ほどで、森への入口、細い獣道にたどり着く。獣道と言っても、それは当時のわたしたちのような、こどもたちが踏みならしてできあがった道だったのだろう。

二百坪ほどの広さに木々や草花がうつそうと生い茂るその場所は、森と言うには少し小さいかもしれないが、まだ小学三年生だったわたしたちの冒険心を十分に満たしてくれる未開の地だった。

そこにわたしたちは秘密基地を建設した。

どこからか持ってきたダンボール、捨てられていた傘、周囲に落ちていた木の枝や葉、今にして思えばどうして崩れなかったのか不思議なものだが、こどもが三人どうにか入れる、三人だけの秘密基地だ。

三人のリーダー格だったYくんのことはよく覚えている。

体は小さいが、喧嘩っ早くやんちゃで生意気な少年だった。

仲間を大切にする。仲間を守る。こういったことには妙に熱くなる少年で、当時流行っていた漫画の影響もあったのだろう。

リーダー格と言っても、三人は互いに対等な関係で、Yくんが他のふたりを子分のように扱うことはなかったし、誰かひとりを使いつぱしりにするようなこともなかった。

わたしはサブリーダー的な存在だった。

たった三人のグループにサブリーダーも何もあつたものではないが、Yくんとは仲のいいコンビで、何をするのもいっしょだったので、Yくんとわたしがいる集まりでは、例えばそれが給食後にドッジボールをする仲間たちであっても、Yくんがリーダーでわたしがサブリ

ーダーだということが、何となく共通に認識されているように思っていた。

そしてもうひとり。確かにもうひとりいた。Aという名前で、男の子だったはずだが、女の子だったような気もする。

Yくんとは中学校もいっしょだったし、高校生の頃も何度か顔を合わせていたのだが、そのAくんとは小学校を卒業してから一度も会っていないので、記憶が薄れているのだろう。

小学校の頃ですら、この秘密基地で遊んだ記憶以外はぼんやりとしたものだ。

Aくんは不思議な少年だった。

口数は少なかったと思うが、いつも笑顔を絶やさず、いつも何かにわくわくしているように見えた。

Yくんやわたしのように活発なタイプではなく、当時の感覚で言う和本を読んでいるのが似合うような、色白で中性的な顔立ちだったそう、顔はよく思い出すことができる。

その顔の印象が強いからこそ、女の子だったような気がするのだろう。

初夏の頃、三人で「キャンプ」と称して秘密基地に集まった時のことだ。

キャンプと言っても泊まるわけではなく、スナック菓子やジュースを持ち寄って、秘密基地で漫画やテレビゲームの話をしたり、周辺でカナヘビを捕まえたり、いつも通りのことを、いつもより少し豪勢に、いつもより少し長く楽しんでいた。

まだ日の落ちる前だが、周囲が暗くなってきた頃、恐らくは午後6時前後と思われるが、秘密基地に来訪者があった。

秘密基地の出入口で不思議そうな顔をしてこちらを見ていたそれは、それは何だったのだろうか。

犬のようであったが、猿のようにも見えた。しかし猿にしては腕が

短く、後ろ足で立ち、少し前傾な姿勢で、短い腕を垂らしていた。腰から下をスリムにした小さなカンガルー、ワラビーというのが最もイメージに近いかもしれない。

Ｙくんが「なんだこれ。犬か」とわたしの顔見ると、Ａくんがやわらかな落ち着いた声で「×××」とその生物に声をかけると同時に、Ｙくんとわたしの間を通り秘密基地を出て、その生物の肩の辺りを掴んだ。何と言ったのかは覚えていない。

またＹくんが「あいつんちの」とわたしの方を見たが、わたしも何も知らなかったので、首を傾げて応答した。

しばらくそのまま、Ａくんはその生物になにやら話しかけていたが、Ａくんがふとわたしたちの存在を思い出したようで、振り返って「あ、仲間の×××」とその生物を紹介した。

その×××は、最初に見た時と同様にじつと不思議そうな顔でわたしたちの方を見ていた。

見たことのない生物ではあったはずだが、愛らしい姿もあって、わたしは特に疑問も持たずにＡくんの家のペットだと考えた。

Ｙくんも同様だったようで、その後、×××を触らせてもらったり、いっしょに森の中を探検して回ったりした。そういえば、その間一度も×××は吠えたりしなかった。

その日、わたしたちは初めてＡくんの家に遊びに行った。確かＡくんに誘われたのだ。

もうすっかり暗くなり、夕飯の時間も近かったので、わたしは少し渋ったのだが、Ａくんの家から電話をすればいいということで、ＹくんとわたしはＡくんに連れられて彼の家に向かった。

いつもＹくんやわたしが利用している砂利道に続く獣道に向かわず、逆側に歩いて約五分ほどだろうか、Ａくんの家は森の中にあった。

「家近いな」とＹくんが話していたが、思い起こせばおかしい話だったのだ。極端に迂回をしなければ、あの小さな森を五分間も歩き続けることなどできない。すぐに外に出てしまはずだった。

多少ジグザグになっていたかもしれないが、少なくともわたしは真っ直ぐに歩いていたと思う。

あるいは五分間という認識が間違っているのだろうか。

それにしても森の中に家があるというのは、やはりおかしい話だ。しかし、まだこどもだったからか、なんとなく違和感を覚えながらも、Ｙくんといっしょになって初めて来た友人の家に興奮していた。Ａくんの家は四角い二階建てで、茶色の壁に覆われており、小さなビルのようなと思った。

家の内部は物が少なく片付いており、Ｙくんの家やわたしの家のような雑然とした雰囲気とは違っていて、わたしはＡくんの家は金持ちなんだと感じたことを覚えている。

Ａくんが母親はいないと言ったことで、わたしは少し安心した。Ｙくんの家では、遅くまで遊んでいるとＹくんの母親にひどく怒られるのだ。

通されたＡくんの部屋は、Ｙくんの部屋と比べるとずいぶんきれいだったが、テレビゲームや漫画など、置いてあるものは大して変わらなかった。

わたしたちがその部屋で漫画を読みはじめると、いつの間に用意をしたのか、Ａくんが食事を持って来た。

それは、ピラフのようなものと、コンソメか何かのスープで、非常に美味だった。

これはＡくんが作ったのか、部屋で食べても怒られないのか、などの話をしていたが、断片的にでも強く覚えているのは、その後の話だった。

食後にＹくんがトイレを借りたいと言って、案内していたＡくんといっしょに戻って来た後、Ｙくんが「トイレがすごい。きれい」と妙にはしゃいでいたが、その言葉が切れたところで、Ａくんがひとつ小さく息を吐いてわたしたちの顔を交互に見て話を始めた。

「ここは基地なの。秘密基地。ここにはわたしと×××しか入れな

い。ふたりが初めてのお客さんだね。本当はダメだけど、×××が来ちゃったし、あまりやりたくないけどね」

何をやりたくなかったのだろうか。わたしたちを家に入れることだろうか。

「遊びに來ただけで、ほら、キャンプみたいなものよね。見つかったら怒られるから、内緒にしておいて。×××も基地も秘密なんだ」親に怒られるのだろうか。そういえば、やはりAくんは女の子だったかもしれない。

「秘密基地のことは絶対他のヤツに言うなよ。変かもしれないけど、また遊んでね」

「秘密基地のことは絶対他のヤツに言うなよ」はYくんがよく言っていた言葉を真似てのことだろう。小さな声でAくんはわたしたちにこのような話をして、その日は別れた。確かAくんが砂利道の所まで送ってくれたのだ。

Yくんは砂利道を歩きながら、前を向いて独り言のように「絶対他のヤツに言うなよ。秘密だから」と呟き、わたしもAくんを守ってやらなければならないと強く感じていた。いったい何からAくんを守るのだろうか。

先日、母が入院したことで近くに行くことになり、ふと秘密基地のこと、Aくんのことを、このように思い出していた。

あの年の夏を過ぎた頃には秘密基地のことなど、もう忘れたかのよう

に別の遊びをしていたが、そこにAくんもいたのだろうか。あの何を売っていたのかわからない商店は、営業をしていなかったが、当時のままの姿で、当時と同じようにその角を曲がると、砂利道は舗装され、あの森があつた場所には何かの工場のようなものが建っていた。

当然、わたしたちの秘密基地は壊れてしまったのだろう。

Aくんはその後どこへ行ったのだろうか。Aくんの秘密基地も壊さ

れてしまったのだろうか。

そもそもAくんとは、いつから友人関係になったのか。Aくんはわたしたちと同じ小学校に通っていたのだろうか。

Aくんを思い起こして、わたしはAくんが異星人、あるいは未来人だったのではないかと考えるようになった。

あのAくんの家、秘密基地もどこか雰囲気がおかしかったし、あの×××はやはり現代の地球にいる生物ではないだろう。

わたしたちに「やりたくない」と言ったことが記憶を操作するようなことだとしたら、わたしの記憶が妙に曖昧なことの理由にもなる。何かの調査のために異星が未来からやってきたのではないか。

あっさりとわたしの推論はあっさりと覆された。

連絡のつく高校時代の友人を通じてYくんの電話番号を手に入れて、YくんにAくんのことを聞いてみたのだ。

Yくんは彼のことをよく覚えていた。初耳だったが、YくんとAくんは同じ高校に通っており、数年前まではたまに顔を合わせることもあったそうだ。

秘密基地の思い出を語ったところ、Yくんの記憶もあやふやだったが、概ねわたしの記憶と食い違ふところはなかった。

Aくんと最初に会った時のことは、Yくんがよく覚えていた。小学校では別のクラスだが、わたしたちの顔は知っていて、たまたま遊びに来ていたあの森の中でわたしたちを見つけて、Aくんから声をかけてきたという出会いのようだった。言われてみると、そうだったかもしれない。別のクラスだったのなら、小学校でのAくんの記憶がぼんやりとしているのもわかる。

また、×××のことを聞くと「名前は覚えてないけど、Aの家の犬だろう」とのことだった。

Aくんに会いたかったが、一度就職した後仕事に辞め、現在は外国の大学に通っているそうで、簡単に会うことはできそうにない。

Ｙくんとは近々会おうと約束をして電話を切ったが、またひとつの推論が思い浮かんだ。

Ｙくんは仲間思いの少年だった。ＡくんからＹくんだけに聞かされた話があったらどうだろうか。

あるいは、Ｙくんにだけ何かをされたのだとしたら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2409y/>

森の秘密基地

2011年11月13日10時44分発行